



特集 グローバル化する高等教育

目次

【事例紹介】	1
ASEANからの留学生を継続的に受け入れ、交流事業を実施 -アスジャ・インターナショナル- Continual Intercultural Exchanges between Japan and International Students from ASEAN: ASJA International アスジャ・インターナショナル事務局主幹 萩原 知加子 HAGIHARA Chikako (Manager, ASJA International)	
【事例紹介】	9
可能性のある国、コロンビアへの留学 -日本・コロンビア間の学術交流- Study in Colombia, a Land of Possibilities 駐日コロンビア共和国大使館 教育・学術交流担当 窪田 有佳子 KUBOTA Yukako (Education Affairs, Embassy of the Republic of Colombia in Tokyo, Japan)	
【事例紹介】	21
外国人留学生の現状と就職促進に向けた取組について -留学生に対する就職支援と日本語教育機関の適正化- Current Status of Foreign Students and Efforts for Employment promotion 法務省入国管理局入国在留課補佐官 高竿 正人 TAKASAO Masato (IMMIGRATION BUREAU, MINISTRY OF JUSTICE, Deputy Director Entry and Status Division Immigration Bureau)	
【日本留学レポート】	27
新たな一歩へ -日本の修士課程で学んだ経験をもとに- To The New Step: Based on my Experiences from Attending a Master's Degree in Japan 千葉大学大学院教育学研究科修了生 シスワン マユリ SRISUWAN Mayuree (Faculty of Education, Chiba University)	
【海外留学レポート】	34
韓国で過ごした345日 -外国人として生きるということ- My 345 Days in Korea: Living as a Foreigner 近畿大学国際学部国際学科東アジア専攻韓国語コース 小林 可奈子 KOBAYASHI Kanako (Faculty of International Studies, Kindai University)	

【事例紹介】

ASEAN からの留学生を継続的に受け入れ、 交流事業を実施

－ アスジャ・インターナショナル －

Continual Intercultural Exchanges between Japan and
International Students from ASEAN: ASJA International

アスジャ・インターナショナル事務局主幹 萩原 知加子

HAGIHARA Chikako

(Manager, ASJA International)

キーワード：アスジャ・インターナショナル、外務省、ASEAN、ASCOJA、元日本留学生会、
文部科学省国費留学生、福田ドクトリン、国際連携プログラム、グローバル化

1. アスジャ・インターナショナルとは

アスジャ・インターナショナル（以下、アスジャという。）は、2000年4月に設立された国際的な組織である。当初5か国で発足し、現在10か国が加盟している。（加盟国：インドネシア、マレーシア、フィリピン、シンガポール、タイ、ミャンマー、カンボジア、ベトナム、ラオス、ブルネイ）

アスジャは、日本国外務省の拠出金を受けて、ASEAN元日本留学生評議会（ASEAN Council of Japan Alumni, ASCOJA（アスコジャ）。以下、ASCOJAという。）に加盟する各国元日本留学生会が推薦する奨学生制度を運営してきた。日本の大学院における教育研究を支援するとともに、留学生に日本語習得、日本文化の体験、日本人との交流の機会を提供し、留学生が将来の日本とASEANの架け橋となるリーダーを育成することを目的としている。各国1名の奨学生を受け入れ、2017年度までの修了生は137名である。

2009年の「事業仕分け」を受け従前のアスジャ奨学金制度は廃止されたが、2014年度の政府予算において新たに「アセアン留学生交流等拠出金」が計上され、文部科学省国費留学生として奨学金を受給しているASEANからの留学生を対象に、交流事業は引き続き実施できることになった。2018年度はASEAN10カ国から各国元日本留学生会が推薦した国費留学生（大学院生、学部生）20名をアスジャ国費留学生として採用した。これにより、2018年度のアスジャ国費留学生は、大学院生67名、学部生

11名の計78名である。2019年度には大学院生18名、学部生1名の計19名が採用され、新たにアスジャに加わることになっている。

アスジャは、ASCOJAからの留学生を継続的に受け入れ交流事業を実施している組織として、ASEAN留学生交流分野における唯一の組織であるとされている¹。

2. アスジャの交流事業

アスジャが2000年の設立以来実施している交流事業は、留学生が来日する4月の「オリエンテーション」に始まり、3月の「アスジャ国費留学生修了式」で終わる1年間のプログラムで構成されている。

5月には「新入生歓迎会」、夏には「国際理解教育のための学校訪問」や一般の日本人家庭での「ホームステイ」、日本人の大学生と3泊4日にわたり都内で英語合宿を行う「アセアン国費留学生と日本人大学生との国際交流ワークショップ」、秋には日本の地方に3泊4日で行き、地方の元気な日本企業を見学し地域の自然文化を学ぶ「地方産業文化体験」、その他、歌舞伎や能楽、茶道など日本の伝統文化を体験する「日本文化体験」、アスジャ国費留学生が自ら企画・運営・実施し、母国やASEANについて紹介する「ASEAN祭り」もあり、年間を通して多岐にわたるプログラムである。

以下、各事業について紹介する。

(1) オリエンテーション

- 新しくアスジャ国費留学生（以下、アスジャ生という。）となった者を対象に、2泊3日の合宿を通じ、アスジャの設立趣旨、これまでの歩み、事業の内容・特色等についてアスジャ生が理解を深めるとともに、アスジャ生としての自覚と使命を認識させる事業である。
- 東京・渋谷区にある国立オリンピック記念青少年総合センターで新入生と先輩学生が一緒に合宿し、寝食を共にする機会を設け、アスジャ生同士のより強固なネットワーク作りを可能としている。
- さらには、先輩からアスジャについての様々な体験談を聞くことで、新入生がアスジャでの新生活をより鮮明に思い描くことができている。



(2) 新入生歓迎会

- 外務省、文部科学省、関係機関・団体等の関係者、及び先輩のアスジャ生を招いて実施している。
- 新入生は日本語で自己紹介スピーチを披露することが毎年恒例になっている。来日後まもない時期ではあるが、日本語ができてできなくても、事務局のサポートを受けながら全員がスピーチ作りを行う。歓迎会までにスピーチの練習をし、当日は大いに緊張しながらも、これからの留学生活への期待を堂々と述べ、決意を新たにしているようである。
- 自己紹介スピーチに続いて、来賓や在校生より新入生への歓迎の言葉をもらい、その後は来場者が自由に歓談し情報交換を行っている。新入生は、自分たちが多くのアスジャ関係者に歓迎され、彼らの留学生活が多くの人々によって支えられているということを実感したと感想を述べている。

(3) 国際理解教育のための学校訪問

- 日本の小学校に留学生を講師として派遣し、自国の文化習慣等を教える授業に協力するとともに、小学生が ASEAN の国々への理解を深め異文化に触れることで、偏見を持たない子供の教育に貢献することを目的としている。
- 同時に、アスジャ生が日本の初等教育の現場において日本の若い世代と直接交流し、日本の初等教育について学ぶ貴重な機会となっている。一例として、日本では実技科目があり、情操教育や体力作りも行われている点、学校給食により食習慣が身に付き、食の安全や衛生観念についても学べる点、クラスメイトと一緒に掃除もし、このような協働作業により社会活動や人間関係、社会責任について学び連帯意識も芽生える点を、日本の初等教育の利点として挙げている。
- 明るく活発で規律正しい日本の小学生たちと触れあうことができるため、毎回の参加を楽しみにしている学生が多い。

(4) ホームステイ

- 新入生を対象に、栃木県小山市や静岡県磐田市などで一般の日本人家庭でホームステイする。約1週間のホームステイを通じ、アスジャ生が日本文化や生活習慣を体験し理解する事業である。
- ホームステイは小山市、磐田市それぞれの地元ボランティアの方々の協力を得て行われ、アスジャ生は地域の一般家庭に滞在し、日本文化の体験や、日本を代表する地元企業の工場等を見学する。これにより学生たちは、楽しみながら、日本の生活習慣や価値観、文化に対する理解をより一層深めることができている。また、地元の日本人高校生との交流も

あり、アスジャ生が日本についての理解を深めると同時に、日本人高校生が東南アジア諸国への興味を増すきっかけとなっている。

- アスジャ生は滞在先や訪問先についての詳細な資料や情報をあらかじめ配布され、事務局からの説明を受け、事前勉強を行っている。このように、ホームステイ参加まで念入りに準備を行っていくわけだが、参加日前夜は「楽しみと緊張と不安とでなかなか寝られずに、当日朝を迎えました」と、東京出発の集合場所にやってくる学生が例年多く見られる。しかし、現地に到着しホストファミリーや関係者に温かく迎えられると、そのような不安は一気に消えてしまうようで、帰京後は皆一様に「すごく楽しかった！」と事務局に感想を伝えにやってくる。アスジャ生の間で大変人気が高い。

(5) 日本文化体験

- 1日の日本文化体験を通して、留学生が日本の伝統文化に触れる機会を設け、彼らの日本文化への理解を深めるため実施している。
- 歌舞伎や能楽の鑑賞、茶道体験の他、相撲部屋稽古の見学、和菓子作り体験、江戸文化体験、講道館での鏡開式に参加する柔道体験など、伝統文化を様々なジャンルで実際に体験して学ぶプログラムとなっている。



(6) 地方産業文化体験

- アスジャ生の2年生・3年生を対象に、3泊4日で地方に出かけ、日本の企業見学・企業と学生のマッチング、地方文化体験等を行い、日本理解を深めることを目的としている。
- 2015年度は、埼玉県・群馬県・栃木県・福島県に出かけた。製糸産業関連遺産見学では明治の殖産興業政策について、世界遺産日光の見学では江戸時代の幕藩体制について、猪苗代湖と磐梯山滞在では野口英世について、会津若松市の訪問では会津藩の歴史についてそれぞれ学び、さらに地元で活躍する企業の見学を行い、日本の“ものづくり”についても理解を深めた。
- 2016年度は防災をテーマに訪問先を東北とし、東日本大震災で被災した宮城県の各地域を見学し、防災についてのアスジャ生の知識と理解を深める機会を提供した。宮城県・山形県による「首都圏在住留学生モニターツアー（ASEAN）」に参加し、被災地の現在の復興の様子や地方文化の魅力等について、アスジャ生がFacebook等のSNSで母国や世界に発信す

るなどして、海外からの観光誘客の促進を図り、被災地の復興支援にアスジャ生が協力したものである。宮城県では、全国2校目で宮城県初の「災害科学科」を開設している多賀城高等学校を訪問し、防災学習授業を受け、日本の高校生と交流した。4日目はアスジャのオリジナル事業として、ユネスコ世界遺産である岩手県の平泉を見学した。

- 2017年度は、東京に近接していながら自然風土や文化歴史などが恵まれた地域として知られる群馬県を訪問した。初日はカーエアコン用のコンプレッサーで世界シェア25%を占有している会社を見学し、同社が近年推進している産業と環境の共存のための活動事例についても学んだ。また、同社の役員・社員と交流会を行い、地元の群馬大学の学生からも招いて、彼らとの交流を深めた。その後は現地NPO法人の協力を得て、農家民泊（ファームステイ）や地域住民との交流会、高崎だるま絵付け、甘楽町見学、富岡製糸場見学を実施した。
- 今年度は静岡県と長野県を訪れた。初日は富士山五合目で雲一つない青空のもと富士山を拝み、御殿場で地元の青年団や関係者との交流を深めた。2日目以降は、1951年の創業以来バルブを中心とした液体制御機器の総合メーカーとして発展し、現在では世界有数のバルブメーカーとして成長した会社の協力により、同社の茅野工場を見学した。日本のものづくり精神を支える企業文化について学ぶことができた。諏訪では諏訪湖畔にある北澤美術館を見学した。同館はエミール・ガレに代表されるフランスのアール・ヌーヴォー期のガラス工芸の作品を数多く展示している。また、戦後を代表する国民的日本人画家として知られる東山魁夷の作品をはじめ、日本画のコレクションも収蔵している。一行は館内を見学し、展示品の美しさに感動するとともに、創設者の作品収集に対する思いについても説明され感銘を受けていた。信州高遠に滞在した折には、こけしの絵付けも行った。アスジャ生の個性を反映してか、ユニークなこけしができがっていた。



(7) ASEAN 祭り（留学生自主事業）

- アスジャ生が自ら企画・実施する事業である。当日は、関係者・一般客を呼んで、自国文化の発表や踊り・ファッションショーを披露し、来場者に対し ASEAN について広く知ってもらうとともに、アスジャ生自身が ASEAN について深く学ぶ機会となっている。

- さらには、企画から運営、当日の実施に至るまでの過程で、アスジャ生が ASEAN の多様性を実感する重要な事業でもある。多様な価値観の中で協働することを通して、アスジャ生がコミュニケーションとチームワークの重要性を痛感し、時間管理術やタスク管理術を磨き、リーダーシップとフォロワーシップについて目覚める結果となっている。
- アスジャ生は自国の民族衣装に身を包んで来場者を迎え、プレゼンやファッションショー、踊りを繰り広げるため、ASEAN10 カ国を一度に身近に体験できる祭りとして、来場者には概ね好評を得ている事業である。2019 年は 11 月 23 日（土）に国立オリンピック記念青少年総合センターにおいて開催する予定。



(8) アスジャ国費留学生修了式

- アスジャ生の修了式を行い、アスジャで過ごした日々について学生たちが感想を述べる式である。
- 修了生には修了証書が授与され、修了生一人ひとりがアスジャでの日々を振り返って感想を述べるとともに、関係者や後輩たちに向けてメッセージを送る機会となる。
- 加えて、アスジャで 1 年を過ごした留学生たちが、1 年間の交流事業について共同で感想をまとめ、代表者が当日スピーチ発表を行っている。

(9) ASEAN 国費留学生と日本人大学生との国際交流ワークショップ

- アスジャ国費留学生と、日本のグローバル人材として活躍を期待される日本人大学生・大学院生が、代々木の国立オリンピック記念青少年総合センターにおいて 3 泊 4 日の合宿をし、英語で意見交換を行い、相互理解を深めることを目的として、2014 年度より実施している。
- 2018 年度は 8 月 30 日から 9 月 2 日にかけて行われ、早稲田大学、上智大学、東京外国語大学、千葉大学、東北大学、埼玉大学、京都大学、大阪大学、東京大学、東京藝術大学、明治大学の日本人学生 33 名が参加した。アスジャ生は 35 名が参加した。
- 日本・ASEAN をテーマに、学生たちが英語によるディスカッション、グループワーク、プレゼンテーションを行うもので、プレゼン前夜はパワーポイントの仕上げのため徹夜する学生が毎年多く存在するほど、大変ハードなスケジュールで進められる。しかしながら、朝から晩まで英語によるコミュニケーションが続く合宿生活を送ることで、都内にいながら

にして留学体験が味わえると、参加者や参加者が所属する日本の大学関係者からは一定の評価を得ているところである。詳しくは以下のウェブサイトを参照されたい。なお、2019年度は8月29日（木）から3泊4日の日程で開催が決まっている。

- アスジャ・インターナショナル（2018）「平成30（2018）年度アセアン国費留学生と日本人大学生との国際交流ワークショップ」<https://asja.gr.jp/fy2018workshop>
- アスジャ・インターナショナル（2018）「アスジャ・インターナショナル主催『アセアン国費留学生と日本人大学生との国際交流ワークショップ』ご報告」
<https://asja.gr.jp/workshop/2018-02.html>



3. 福田ドクトリンとアスジャ・ASCOJA

以上紹介したように、アスジャは設立以来、ASEAN からの留学生を継続的に受け入れ交流事業を実施しているが、それらは「福田ドクトリン」の精神を踏まえ運営されているものである。最後に、福田ドクトリンとアスジャの関係について、ここで簡単に紹介したい。

福田ドクトリンは、1977年8月17日、当時の福田赳夫内閣総理大臣が、ASEAN 諸国歴訪の最後の訪問地であるフィリピン・マニラで発表したスピーチであり、次の三原則で締めくくられている。

- (1) 日本は軍事大国にならず、ASEAN ひいては世界の平和と繁栄に貢献する。
- (2) 日本は ASEAN の国々との間に、真の友人として「心と心の触れあう」相互信頼関係を構築する。
- (3) 日本と ASEAN は対等なパートナーであり、日本は ASEAN およびその加盟国の連帯と強化に協力し、東南アジア全域にわたる平和と繁栄の構築に寄与する。²

福田ドクトリンは、その後の日本の ASEAN 外交政策の基軸となった。また、福田ドクトリンの発表に3年先立つ1974年に、当時大蔵大臣であった福田赳夫元総理の呼びかけで外務省招聘事業「東南アジア元日本留学者の集い」が始まった。この集いで交流を深めた参加者たちが中心となり、ASEAN 各国の元日本留学者同士の交流を目的として、ASCOJA が1977年6月に設立される。ASCOJA は、元日本留学者が組織する ASEAN 各国の元日本留学生会の連合体組織であり、各国において日本文化や日本語などの普及活動を、日本大使館と連携しながら実施している。

この ASCOJA の日本側カウンターパートとして、外務省の拠出金を受けて2000年4月に設立されたのが、アスジャである。

福田ドクトリンが掲げる「心と心の触れあう」相互信頼関係を礎として、アスジャの交流事業はこれまで実施されてきた。交流事業を体験しアスジャを修了した留学生は、先述の通り 2017 年度までに 137 名に達しており、日本と ASEAN との友好協力関係を担う架け橋として各方面で活躍している。今後も毎年 20 人前後の留学生がアスジャを修了する予定である。

また、アスジャは、ASCOJA のカウンターパートとして、ASCOJA や各国元日本留学生会の活動の支援事業、及びアスジャ・ASCOJA ネットワーク強化支援事業も行っている。ASCOJA が毎年開催する ASCOJA 総会・幹部会に出席し、ASCOJA 加盟の元日本留学生会と連携を深め、ASCOJA・留学生会との共催による国際シンポジウムを年数回実施している。東京では毎年アスジャ理事会を開催し、ASEAN 各国からアスジャ理事・ASCOJA 幹部を招聘し、理事会期間中に開催される ASCOJA 幹部会の支援も行っている。

今後も ASCOJA や元日本留学生会との連携により交流事業を実施し、日本と ASEAN の友好関係を将来支えることになる架け橋リーダーの育成に努めてまいりたい。

¹ 外務省 (2016) 「国際機関等に対する拠出の評価の実施 任意拠出金 アセアン留学生交流等拠出金」 <https://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000184710.pdf> (2019年3月20日アクセス)

² 外務省 (2010) 「わかる！国際情勢 Vol. 64 ASEAN と日本～アジアの平和と繁栄のために」 <https://www.mofa.go.jp/mofaj/press/pr/wakaru/topics/vol64/index.html> (2019年3月19日アクセス)

【事例紹介】

可能性のある国、コロンビアへの留学

-日本・コロンビア間の学術交流-

Study in Colombia, a Land of Possibilities

駐日コロンビア共和国大使館 教育・学術交流担当 窪田 有佳子

KUBOTA Yukako

(Education Affairs, Embassy of the Republic of Colombia in Tokyo, Japan)

キーワード：コロンビア留学、スペイン語留学、大学学術交流、海外の高等教育事情、グローバル化

1. はじめに

コロンビアは、太平洋とカリブ海に面した南米大陸の北西の端という恵まれた位置にあり、多様な気候と地理的条件により、世界有数の生物多様な国のひとつである。また、先住民族文化、ヨーロッパ文化、そしてアフリカ文化が融合し、独自の豊かな文化を生み出す魅力的で様々な可能性のある国である。国土面積は1,139,000 km²（日本の約3倍）、人口は約4,550万人¹（日本の約3分の1）、現在の平均年齢は、30歳代と若い世代が多い国のひとつとなっている。

過去、50年余り続いていた内戦はフアン・マヌエル・サントス前大統領（2016年ノーベル平和賞を受賞）2016年6月に停戦合意に達し終結したことにより、その後コロンビアは急速な変貌を遂げ、和平構築にも力を入れている。

治安の改善などを背景に外国からの投資が急増しており、世界銀行の「ビジネスのしやすさ」ランキング（2019年）では、中南米でメキシコ、チリに次ぐ第3位であると評価され、ラテンアメリカの中では第4位の経済規模である。日本貿易振興機構（ジェトロ）が「2018年度中南米進出日系企業実態調査」の中でコロンビアに進出している日系企業にアンケートを行った結果、現地日系企業の72.2%が今後の事業を拡大していくと回答し、その理由として73.7%の企業が「市場規模、成長性」の面でコロンビアに投資環境メリットがあると答えた。加えて、5社に1社が日本人駐在員を増員すると回答している結果などを見ても、現在のコロンビアが現地に進出する日本企業にポジティブに評価されて

¹ DANE2018 <https://www.dane.gov.co/index.php/estadisticas-por-tema/demografia-y-poblacion/censo-nacional-de-poblacion-y-vivenda-2018/cuantos-somos>

いることが見てとれる。²

また、コロンビアは旅行先としても注目され、今や世界有数の観光大国となっている。外国人旅行者数は増加傾向にあり、2010年の260万人から2014年の420万人に急増の後、2018年には430万人を記録し、インバウンド観光成長率は2017年比で7.7%成長（ラテンアメリカの成長の2倍）している。Web版『ロンリープラネット』（スペイン語）でコロンビアは2017年に訪れるべき国第2位に選ばれた。

日本との関係では、昨年、日本・コロンビア修好110周年を迎えた。両国の貿易関係に着目すると、主な対日輸出品は石炭、原油、コーヒー、切り花等で、対日輸入は自動車、鉄鋼、ゴム製品等である。（2017年財務省貿易統計）主要産業のひとつであるコーヒー（世界第3位のコーヒー生産国³）の他に、花の輸出も盛んで、日本市場に出回る輸入カーネーションの約70%がコロンビア産である。豊かな土壌と一年を通じて気候が安定しているため、中央部の山岳地方では色鮮やかで品質の高い1,400種以上の品種の花が栽培され、カーネーションの生産高は世界一、現在、海外90以上の国に向けて輸出され、花の輸出国としては世界第2位、世界的にコーヒーと同様、コロンビアは「花の国」としての地位を獲得している。

2. コロンビアの教育への取り組み

政治・経済が安定する中、2018年に発足した現イバン・ドゥケ・マルケス大統領政権の元、政府は格差解消に向け幼児教育拡充、全日制授業の拡大、低所得者向け大学授業料の無償化を掲げ、教育制度改革に力を入れている。⁴

前政権では、「現在と将来のために教育は国を構築する一番の投資である。」とし、2025年までにラテンアメリカで最良教育国になることを目指しているとの方針を示していた。平等を達成する平和な国を構築するための最も強い基盤として質の高い教育を経済状況に関わらず、全ての子供と若い人々に、より良い人間形成、生活の変革、夢の実現に貢献する平等な教育を提供する必要性があると考え、多くの若者が高等教育を受けられるよう促進した結果、2016年には238万人の学生が高等教育課程に進学している。また、更に、コロンビアは広く世界に目を向け、高等教育のグローバル化を目指している。

² 日本貿易振興機構（ジェトロ）「変貌するコロンビア - ビジネスのしやすい国へ - 」

<https://www.jetro.go.jp/tv/internet/04/20150402160.html>

³ International Coffee Organization(2017/2018)

<http://www.ico.org/historical/1990%20onwards/PDF/1a-total-production.pdf>

⁴ 日本貿易振興機構（ジェトロ）「コロンビアビジネスセミナー—投資の機会と創造—」2019年3月22日配布資料

3. 日本とコロンビアの大学機関間での学術交流の事例

日本とコロンビアの学術交流は、近年、文部科学省による「大学の世界展開力強化事業」や科学技術振興機構（JST）の「さくらサイエンスプログラム」、科学技術振興機構（JST）と国際協力機構（JICA）による「地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム（SATREPS）」等の支援や大学間の学術交流協定締結などにより、年々留学生数が増加している。

また、昨年2018年にはボゴタにあるロスアンデス大学キャンパス内に、日本政府による日本文化・経済・学術センターが開設され、コロンビア人にとって日本をより知る機会が増えている。

コロンビアとしては、今後、日本との協定校を一層増やし、学術交流を促進したいと考えている。また、既にコロンビアと交流のある日本の大学は、充実したプログラムを実施している。2019年3月現在の大学間での具体的な学術交流事例を一部紹介する。（以下順不同）

事例：群馬大学

2007年に交流協定締結。サバナ大学からの交換留学生、サバナ大学付属病院から研修生（医師）を、各医学分野へ受入れる。短期研修として医学部医学科の学生5名をサバナ大学に派遣し、2週間の地域医療実習を実施。また共同研究や教員・研修者の派遣などが継続して行われている。

事例：埼玉大学

2018年、コロンビアの3大学と学術包括協定ならびに学生交換覚書を締結した。JST（科学技術振興機構）による「さくらサイエンスプロジェクト」の支援により、2回にわたってそれぞれ約10名のコロンビアの学生を招聘した。2018年12月に来日した情報科学専攻の学部生は「情報技術の科学と社会への実装」を、2019年1月に来日した人文社会科学系を中心とした学生は「科学技術と社会実装のための人材交流」をテーマに、日本の社会・文化および高等教育の実態、情報技術とロボットへの応用、化学と生物物理分野への情報技術の応用に関して、それぞれ専門の教員より講義を受け、日本人学生と共に議論を交わしながら親交を深めた。2019年3月同大学教授がコロンビアを訪問し、複数の大学で講義を行うなど継続的な学術交流が行われている。

事例 上智大学・南山大学・上智大学短期大学部

3大学が連携し、文部科学省による平成27年（2015）年度「大学の世界展開力強化事業」に採択された「人の移動と共生における調和と人間の尊厳を追求する課題解決型の教育交流プログラム（Sophia-Nanzan Latin America Program：以下、LAP）」の枠組みの中で、2016年より夏期休暇中約4週間、教皇庁立ハベリアーナ大学で開講する短期スペイン語集中研修のため、上智大学および南山大学の学生をコロンビアに派遣している（上智大学単体では2015年度より派遣）。本研修は、高度なスペイン

語運用能力を習得するとともに、コロンビアの社会や文化、歴史について理解を深めることを目的に実施しており、現地で学生は同大学教職員および在校生の家庭にホームステイし学内外で交流を深めている。その他、両大学では長期留学でも教皇庁立ハベリアーナ大学、ロスアンデス大学と学生交換を活発に行っており、特に受入留学生については、両大学で連携したマルチキャンパス受入プログラムを実施している。

事例 上智大学

2011年に教皇庁立ハベリアーナ大学、2015年にロスアンデス大学と交換留学協定締結以来、学生の派遣・受入が継続して行われている。ハベリアーナ大学とは、交換留学協定締結に先立ち、2007年より学術交流協定を締結しており、様々な学術交流が行われている。前述のLAPによる交流の活発化を受けて、近年では新たに上智大学地球環境学研究科の教員と、ハベリアーナ大学の研究者との共同研究も始まっている。2018年12月には、科学技術振興機構「さくらサイエンスプラン」に採択されたプログラムより、同大学の学生と教員計11名を招聘し、上智大学地球環境学研究科の教員と共同で、湿地や島の持続可能性に焦点を当てた現地調査やシンポジウムが行われた。2019年4月より短期教員交換制度を初めて利用し、ハベリアーナ大学建築学部教授が上智大学にて研究活動を行う予定である。2018年12月にコロンビア外務大臣が来日した際には、駐日コロンビア大使館と共催で上智大学にて「外相来日記念講演」が開催された。

事例：筑波大学

文部科学省による平成27年度「大学の世界展開力強化事業～中南米等との大学間交流形成支援～」採択事業に、「持続的な社会の安全・安心に貢献するトランスパシフィック協働人材育成プログラム」が採択されている。本事業は筑波大学が推進する国際的互換性のある教育に向けた改革の下、日本と経済連携協定を締結したメキシコ、コロンビア（交渉中）、ペルー、チリ（「太平洋同盟」諸国4か国）と160万人の日系社会を擁するブラジルを交流相手国とし、中でも筑波大学との厚い交流実績を有する中南米屈指の大学との連携しつつ、共通課題である持続的発展と地球規模課題の解決に資する人材の育成を目的として実施する双方向の協働教育・履修証明プログラムである。

コロンビアとの交流については、ロスアンデス大学との大学間交流協定のもと、双方向による短期研修（3か月未満）や交換留学（6～9か月）を行うことで、相互の社会・文化への理解を深めつつ、共有する社会課題・地球規模課題への解決に向けた協働学修を実施している。また、現地協力機関や日系団体、筑波研究学園都市をはじめとする国内連携企業・機関等でのインターンシップを組み込み、課題認識と現場感覚の養成を図っている。2018年8月にはロスアンデス大学にて、第4回共同プログラム運営委員会を開催した。また、科学技術振興機構（JST）「日本・アジア青少年サイエンス交流事業さ

くらサイエンスプラン」により、昨年12月にロスアンデス大学の学生及び教員を招聘した。「日本の最先端科学及び産業技術体験プログラム」をテーマに、筑波大学の研究施設や筑波研究学園都市の研究所、更には民間の産業技術の視察及び現場体験等を取り入れ、多岐にわたる日本の最先端の科学技術についての理解と関心を深める研修内容であった。これらの事業を通じて、日本と中南米地域を結ぶ架け橋となる人材育成事業を進めている。

事例：東京外国語大学

2015年に、コロンビア第二の都市メデジンにあるエアフィット大学と国際学術交流協定/学生交流協定を締結し学生交流を開始した。この学生交流は、同年に採択された文部科学省「大学の世界展開力強化事業『日本と中南米が取り組む地球的課題を解決する文理協働型人材育成プログラム』」により同事業の交換留学プログラムの一環として推進している。コロンビア人留学生は同大学の日本語教育プログラムにて日本語・日本文化を学ぶほか、学部にて国際関係論、日本近代史や政治学等を学び、日本人学生はエアフィット大学でスペイン語、ラテンアメリカ経済等の学習やダブルディグリープログラムによる修士課程でのラテンアメリカ文学の研究を行っている。

事例：名古屋大学大学院環境学研究科

科学技術振興機構（JST）と国際協力機構（JICA）による地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム（SATREPS）の『コロンビアにおける地震・津波・火山災害の軽減技術に関する研究開発』（2014年5月～2020年6月）を実施している。この研究では、日本側の防災科学技術研究所、東京工業大学、東北大学、コロンビア側のコロンビア地質調査所（SGC）、コロンビア海洋機構（DIMAR）、コロンビア危機管理庁（UNGRD）、ボゴタ危機管理局（IDIGER）、コロンビア国立大学、ロスアンデス大学とともに、専門家派遣、研究者受け入れを行い、これまでコロンビア内で蓄積されてきた観測データや知見に日本の最新の監視システムや被害予測技術を融合させ、災害被害を軽減する技術の開発を行っている。

https://www.jst.go.jp/global/kadai/h2606_colombia.html

事例：明治大学

2017年、中南米との関係強化を推進する「明治大学ラテンアメリカプロジェクト」を立ち上げ、コロンビアを含む中南米関連のシンポジウムを行った。コロンビアとは、ロサリオ大学、ホルヘ・タデオ・ロサノ大学、エアフィット大学と協定校を締結、これまで学生間のテレビ会議や短期の相互訪問を行うなどの交流を行っている。また、「ラテンアメリカ×マンガ プロジェクト」として大学蔵書の漫画本をエアフィット大学に寄贈し、同大学側では言語センターで日本語を学ぶ学生が中心となって移動図書館を実施するなど両校の交流が行われている。また例年コロンビアからの留学生を受け入れ

ている。

4. 多様性に富む国コロンビアでスペイン語を学ぶ

コロンビアの公用語スペイン語は、英語と北京語に続く3番目に話されている言語でありコロンビアは、スペイン語の研究、高い学術レベルのために学ぶ外国語としてのスペイン語の学習地として、ラテンアメリカの中でも最も重要な国のひとつである。外国人対象としたスペイン語コースを備える大学が各都市にあり、下記は、スペイン語コースのある大学の一例である。

例) Universidad Nacional de Colombia(コロンビア国立大学ボゴタ) の外国人コース

初心者から6レベルあり、17歳以上であれば受講可能。

スケジュール	1コース受講期間	1コース受講時間	費用
月曜日～金曜日 16:00 - 18:00	2か月間 1年間に4コースあり	80時間	885.300 コロンビアペソ (約 32.000 円)

Universidad de Los Andes

<https://centrodeespanol.uniandes.edu.co/>

Universidad Nacional de Colombia

http://www.humanas.unal.edu.co/extension_lenguas/cursos/spanish-courses-foreigners

Universidad Santo Tomás

<http://institutodelenguas.usta.edu.co/index.php/servicios/curso-de-espanol-para-extranjeros/cursos>

Pontificia Universidad Javeriana

<https://www.javerianacali.edu.co/relaciones-internacionales/programa-de-espanol-lengua-extranjera-ele>

Universidad EAFIT - Bogotá

<http://www.eafit.edu.co/2014/version2014/otros-idiomas/Paginas/espanol-adultos.aspx>

スパニッシュ・イン・コロンビア

「スパニッシュ・イン・コロンビア」は、外国語としてのスペイン語学習プログラムを海外に向けて発信することを目的につくられたプロモーションプログラムで、コロンビア国内10都市（アルメニア、バランキージャ、ボゴタ、ブカラマンガ、カリ、カルタヘナ、エル・ソコロ、マニサレス、メデジン、ペレイラ、ビジャビセンシオ）にある約30校の大学が参加している。大学の外国人向けスペイン語クラスに関する情報（プログラムの詳細、レベル、時間割り、関連サービス、費用、連絡先情報、各都市に関する情報等）は下記のURLを参照。

<https://spanishincolombia.caroycuervo.gov.co/quienes-somos/spanish-in-colombia/>

5. コロンビア政府奨学金留学生の募集に関して

コロンビア政府奨学金留学生の募集に関して、コロンビア教育省直轄のコロンビア留学推進協会（ICETEX）より公募が行われる。2019年度募集要項はまだ公表されておらず、決定後、ホームページなどで告知する。ICETEX（イセテックス）は、コロンビア人学生への貸付制度、各奨学金制度を有し、学生への支援および海外で行う技術研究のために設立された組織で、国内および国際的な教育協力活動を通じて、コロンビアの教育および文化的発展を促進している。コロンビア政府からの奨学金支給留学生募集の告知も行っている。 <https://portal.icetex.gov.co/portal>

ICETEXは、コロンビア人学生に奨学金を提供している諸国間の互惠協約として、これらの国々の出身者を対象に、大学院研究生課程、修士課程、博士課程の奨学金留学生を募集する。この奨学金はコロンビア国籍を持たず、コロンビア在住でない外国籍の者を対象としている。なお、本奨学金についての詳細は、 <https://portal.icetex.gov.co/Portal/Home/HomeEstudiante/becas/programa-de-reciprocidad-para-extranjeros-en-colombia/becas-para-posgrado/> を参照し、掲載されている以外の事項（受給できる奨学金種類や学歴条件など）については各自で受入機関に照会すること。

コロンビア留学、コロンビアとの学術交流に関するお問い合わせ

駐日コロンビア大使館 教育・学術交流担当 窪田

東京都品川区上大崎 3-10-53

駐日コロンビア大使館

TEL : 03-3440-3451 (内線 33)

E-Mail : yukako.kubota@cancilleria.gov.co

6. 学生ビザ申請に関して

学生ビザの必要な方は下記を参照し、まずはコロンビア大使館領事部にお問い合わせ下さい。

査証手続と必要書類

(REQUISITOS Y TRAMITES PARA VISAS)

2018年8月現在

査証の種類	学生 (TIPO-V)
滞在日数	入学許可書に基づく、最長1年 出入国の制限なし
写真	カラー写真1枚 3x4cm バック白、顔大きく髪が眉にかかっていない写真
申請書 (領事部発行)	1部

その他	<ol style="list-style-type: none"> 1. 入学許可書（週最低 10 時間受講を明記）（*） 2. 経済保証書（銀行残高証明） 3. ビザ発給願書（例文参照） 4. 18歳未満の場合は保護者の同意書。コロンビア滞在中の経済的責任と行動を保証したもの。（サイン証明付きのもの）
パスポートコピーと過去コロンビアに入国した事が有る場合は最新のビザと出入国スタンプのある頁のコピー（A4 サイズ）	1 部

*写真は背景が白で、サイズは3 x 4 cm、顔が大きく（肩より上、着衣は白以外）、眉毛がはっきり写ったもの、ウェブ申請にアップしたものと同一写真を提出のこと。

（*）印がついた書類は全てコロンビア本国関係当局で発行を受けること。

申請書類について

1. 書類は言語がスペイン語のため、その他の言語については訳文が必要。
2. （*）印の書類はコロンビア関係当局が発行したもの。
3. 経済保証書は、申請者名義の銀行残高証明書又は保護者名義（この場合サイン証明付保証書も要）の残高証明書が有効。
4. 過去にコロンビアの査証を取得したことのある方は、最後に取得した査証のコピーを提出。
5. 過去にコロンビアに出入国をした事がある方は、最新出入国スタンプの有るページのコピーを提出。

申請方法

1. 全ての査証申請はまず、コロンビア外務省ウェブサイトを通じ申請すること。（代理申請可）
<https://www.cancilleria.gov.co/tramitesservicios/visa>
 申請書類をアップする時は必ず旅券コピー（パーソナルデータの有る頁）から行うこと。
 この場合申請書をアップする必要なし。
 申請データを保存すると査証料の支払い場所記入のサイトが出る、C. TOKIO を選ぶと申請番号が出るのでその番号を申請書の上部に記入する。
2. ウェブサイト申請後、申請書類一式と写真をコロンビア大使館領事部に提出し、申請書審査料を支払う（代理申請可）
3. 後日、アポイントを設定しビザを発給する。（原則的には本人が領事部に出頭要）

領事宛て学生ビザ発給願い書の例文

発信地（例Tokio）, _____		日付 _____
Señor		
Cónsul de Colombia en Tokio Japón		
Yo _____	氏名 _____	identificado(a) con el Pasaporte No. _____
de Japón solicito comedidamente expedición de Visa de Estudiante Tipo V.		
Me comprometo actuar de buena conducta en Colombia y sufragar todos los gastos necesarios durante mi estancia hasta regresar a mi residencia para lo cual, adjunto el Estado de Cuenta de mi ahorro en Banco de _____		
_____ 預金銀行名		
Mi contrato de estudio con la Universidad de _____ es		
_____ コロンビアの受入先大学名		
desde el _____	受入開始日 _____	hasta el _____
_____ 受入終了日 _____		
Firma	サイン	
Nombre	氏名	
Pasaporte No.	パスポート番号	
Domicilio en Colombia	コロンビアの住所	

注：銀行残高証明が本人の名義でない場合、銀行残高名義人による領事への発給願い書が別途必要となる。
その場合は、領事部に発給願い書の例文をお尋ね下さい。

査証申請受付時間（コロンビア大使館領事部）

月曜日～金曜日（祝日は除く） 午前9時～午後1時 午後2時～4時

※ 申請の際は、電話もしくは、メールにてご連絡下さい。

東京都品川区上大崎 3-10-53

駐日コロンビア大使館 領事部

TEL:03-3440-6492

E-MAIL: consuladotokio.novedades@cancilleria.gov.co

参考：・コロンビア貿易投資観光促進機構（PROCOLOMBIA）公式旅行ガイド

<http://www.colombia.travel/ja>

・コロンビア貿易投資観光促進機構（PROCOLOMBIA）発行パンフレット

・コロンビア貿易投資観光促進機構（PROCOLOMBIA）ホームページ

・日本外務省ホームページ 中南米 コロンビア共和国

<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/colombia/index.html>

・コロンビア外務省発行資料

・コロンビアを知るための60章/明石書店出版/ 二村久則（編著）

・日本貿易振興機構（ジェトロ）2018年度 中南米進出日系企業実態調査

<https://www.jetro.go.jp/world/reports/2019/01/534aedc512ccb88c.html>



(参考：下記は昨年 2018 年度の募集要項)



対象者：



コロンビア*で専門課程・修士課程・博士課程のいずれかの就学を希望する外国籍の者。

開始日：2018年 2学期

*コロンビア国籍を有する者、又は現在コロンビア在住の者は対象外。

待遇：



授業料・登録料



生活費



健康保険



ビザ・査証

応募資格：



大学を卒業した又は学士号を修得（分野を問わない）した社会人経験が有る50歳未満のコロンビア国籍を有さない者。

成績優秀でコロンビアの5段階評価（1～5）で平均が最低4.0以上であること。

専攻分野で最低1年の職務経験を有すること。

十分なスペイン語能力（読み、書き、会話）を有する - （DELE試験B2レベル合格者）こと。

当公募に別添のカタログに記載の教育機関より入学許可を得ていること。

当プログラムが負担する費用は？

100% 就学期間中の学費

生活費（月額）

2018年度の最低賃金3ヶ月分相当

\$2,343.726
(コロンビアペソ)



緊急費用 \$ 208,853

就学期間中にやむを得ない事情がある場合、
または事前にコロンビア留学推進協会（ICETEX）に申請し
許可後、一度限り支給。

充実した保証内容の健康保険
コロンビア国内での
就学期間中のみ有効



教材費 1年に1度

\$ 401,321 (コロンビアペソ)
(就学期間中、1年毎に支給)

準備費用

\$ 401,321 (コロンビアペソ)
就学開始時1度限り支給



ビザ・査証費用

コロンビア留学推進協会（ICETEX）が
Vビザ（来訪者ビザ）の発行を保障



応募期日：
2018年6月1日

応募方法：

1. www.icetex.gov.coにアクセス
2. ウェブサイト内の「BECAS」をクリック
3. さらに「Becas de Posgrado」にアクセス

【事例紹介】

外国人留学生の現状と就職促進に向けた取組について

－留学生に対する就職支援と日本語教育機関の適正化－

Current Status of Foreign Students and Efforts for Employment promotion

法務省入国管理局入国在留課補佐官¹ 高竿 正人

TAKASAO Masato

(IMMIGRATION BUREAU, MINISTRY OF JUSTICE,

Deputy Director Entry and Status Division Immigration Bureau)

キーワード：就職支援、日本語教育機関、在留資格、高等教育機関の国際展開、グローバル化

1 留学生の入国・在留・不法残留の現況

平成16年以降の在留資格「留学」に係る新規入国者について、平成23年に東日本大震災による影響による減少がみられますが、年々増加傾向にあり、直近の平成30年では12万4,269人と過去最高となっています。これを国籍別に見ますと、中国が4万2,151人で全体の約3分の1を占めており、次いで多いのがベトナムの2万6,125人で全体の約2割を占めているといった状況です。

次に、「留学」の在留資格による在留外国人数の推移ですが平成29年に30万人の大台を突破し、直近の平成30年末では33万7,000人となっております。特に平成26年以降は年間2～3万人を超えるペースで増加しており、急激に増加しているといった状況です。これを国籍別で見ますと、最も多いのは中国の13万2,411人であり緩やかな増加となっているところ、特に最近大幅な増加傾向にあるのは、ベトナムとネパールであり、ベトナムは8万1,009人で6年前の約4倍、ネパールは約2万8,987人で同じく6年前の約3倍の増加となっています。

続きまして、留学生の不法残留者数の推移ですが、平成9年に2万5,000人が不法残留状態でしたが、審査の厳格化や摘発の強化等により、平成26年の1月には2,777人と20年前の約10分の1まで減少しました。しかしながら、平成27年以降は留学生の急増に伴って再び増加傾向にあり、直近の平成31年1月においては4,708人が不法残留となっています。これを

¹ 所属は2019年3月執筆時。

国籍別に見ますと、平成26年では7割程度を占めていた中国が1,074人と半減した一方で、ベトナムは6年前の148人から3,065人と20倍を超える勢いで増加しています。

2 日本語教育機関の現状

大学や専門学校へ進学を希望される方の中には、まずは日本語教育機関での日本語習得を目的としている方も多くいらっしゃると思いますので、日本語教育機関の現状について説明いたします。

外国人留学生在が日本語教育機関で日本語を習得することを目的として「留学」の在留資格を許可されるためには、法務省告示されている当該機関に受入れられる場合に限られます。

日本語教育機関を法務省告示するに当たっては、平成28年7月22日に法務省入国管理局が定めた「日本語教育機関の告示基準」（以下「告示基準」という。）に適合する必要があるとあり、当該適合性に係る判断においては、文部科学省や文化庁の意見を聞いた上で判断しているところです。

この告示基準については、平成29年10月期生の受入れから運用を開始しているところであり、①設置者及び校長その他教員の欠格理由を明確に規定、②入学者の募集、③入学希望者の選考、④適切な在籍管理、⑤告示後のフォローアップの措置等といった要件を定めているほか、これらの要件に該当しない場合においては法務省告示から抹消するといった規定も設けており、法務省告示から抹消された場合は、新たな留学生の受入れができないこととなります。

日本語教育機関の現在の設置状況については、特にこの2～3年の間は年間70校を超える日本語教育機関が新規に設立されているといったような状況であり、本年2月現在では749校が法務省告示されています。

これを設置形態別に見ますと、株式会社等の営利法人が約6割以上を占め、学校法人等は全体の約4分の1程度といった内訳となっており、更に地域別に見てみますと、関東地方が圧倒的に多くて全体の約半数を占めており、関東に次いで多いのは近畿地方、中部地方の順となっています。

3 外国人留學生に関する問題点等

近時の留學生に係る問題について簡単に説明します。留學生の新規入国者の増加に伴い、新規の不法残留者の発生数や刑法犯で検挙される留學生も比例して増加傾向にあります。

最近の報道でもよく耳にすることがあると思いますが、留學生による資格外活動許可の範囲を大きく超えたアルバイトの実態等も問題になっているところであり、日本語教育機関が急増してきているという背景には、留學生を自らの企業の人手不足解消のためにアルバイト等として労働力を確保しようとする実態や、このような資格外活動許可の制限時間の超過を日本語教育機関が学校ぐるみで行わせているような実態も確認されています。

また、留學生については一般的に週28時間以内、また、学則上の長期休業期間においては1日

8時間以内の資格外活動が包括的に許可されているところですが、日本語教育機関の新規設立に係る法務省告示への適否に係る確認時において、先ほど申し上げたように1日8時間という長期休業期間における資格外活動の延長が認められている特例を不正に利用していた教育機関も確認されています。

具体的には、学則上の長期休業期間とは夏季休暇や冬期休暇等を想定しているところですが、2か月間で4か月分の授業を行い、次の2か月間を長期休業として繰り返し、年間の半分を長期休業期間とすることにより1日8時間の資格外活動を可能とするといったカリキュラムを組んでいたというものでした。

また、外国の仲介業者の方が日本に留学すると多額の金銭を稼ぐことができるとして留学生を募集し虚偽の経歴や学歴等に関する文書を作成するなどして不当な手数料を取っているというような実態もあるようです。

このような状況で来日した留学生については、入国当初から多額の借金を抱えることとなり、借金返済のために勉強よりも就労活動に専従しなければならず、資格外活動許可の制限時間を大きく超過したアルバイトの実態になっているのではないかと考えられます。

もちろん留学生の中には、そもそも当初から仕事をしたいという方もあり、このような場合、留学生が日本語教育機関を利用して「留学」の在留資格を取得している方もありますので注意が必要です。

このような問題に対応するため入国管理局における審査においては、留学生の入国の目的が真に勉強を目的としていることの確認はもとより、留学期間中の学費や生活費を支弁するための経費支弁能力等については厳格に審査を行っているところであります。

4 我が国における外国人労働者の現状

平成30年10月末における外国人雇用状況届出に基づいた我が国の外国人労働者は約146万であり、年々増加傾向にあります。外国人労働者の内訳を在留資格別に見ますと、①就労目的で在留が認められる者（在留資格「技術・人文知識・国際業務」、「経営・管理」、「技能」等）が約27.7万人、②身分に基づき在留する者（同「永住者」、「日本人の配偶者等」、「定住者」等）が約49.6万人、③技能実習生が約30.8万人、④特定活動（ワーキングホリデーやEPA看護師候補者等）が約3.6万人、⑤資格外活動が約34.4万人であります。

なお、資格外活動による外国人労働者のほとんどが留学生であり、「留学」の在留資格を許可されている者の9割以上が資格外活動許可を受けてアルバイトを行っている状況です。

5 外国人留学生の就職状況

留学生の日本企業等への就職状況について着目してみますと、平成29年に留学生が我が国の企業等への就職を目的として行った在留資格変更許可申請に対して処分した数は2万7,926人(前年比6,028人増)、うち許可数は2万2,419人(前年比2,984人増)で、いずれも前年と比べて増加し、過去最高を記録しました。

これを、①国籍・地域別内訳で見ると中国が1万0,326人、ベトナムが4,633人、ネパールが2,026人の順であり、②変更許可後の在留資格別では「技術・人文知識・国際業務」が2万0,486人で全体の91%を占め、③就職先の職務内容では「翻訳・通訳」が8,715人、「販売・営業」が5,172人、「海外業務」が3,479人の順となっています。

6 外国人留学生の我が国企業への就職の円滑化のための入国管理局における取組

入国管理局における留学生の我が国企業への就職の円滑化のための取組について、留学生が我が国において就職する場合に最も多い在留資格である「技術・人文知識・国際業務」について説明します。

この在留資格については、本邦の公私の機関との契約に基づき、大学や専修学校等で学んだ学術上の素養等を生かすことにより、専門的・技術的分野における業務に従事する場合に許可されるものです。

審査のポイントとして1点目は、実際に従事する業務内容が専門的・技術的な分野に該当するものであるのか、仮にその該当性が認められる業務であったとしても、その他業務が在留資格該当性を認められない場合においては、それぞれの業務量のバランスが重視されることとなります。

2点目は、従事しようとする業務に必要な技術や知識に関わる科目を専攻して卒業しているかということの確認となりますが、この場合、大学と専修学校の卒業生では取扱いが異なります。具体的には、大学は、学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させることを目的とし、また、その目的を実現するための教育研究を行い、その成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与するとされており、このような教育機関としての大学の性格を踏まえ、大学における専攻科目と、従事しようとする業務の関連性については、従来より柔軟に判断しています。その一方で、専修学校は、職業若しくは實際生活に必要な能力を育成し、又は教養の向上を図ることを目的とされていることから、専修学校における専攻科目と従事しようとする業務については、相当程度の関連性を必要としています。

3点目として、日本人と同等又はそれ以上の報酬を受けていることであり、この3点が「技術・人文知識・国際業務」の在留資格変更許可申請における審査の主なポイントとなっていますが、この他にも素行が善良であることや入管法に定める届出等の義務を履行していることなども確認されます。

次に、大学等を卒業又は専修学校専門課程において専門士の称号を取得して修了した留学生の方が卒業後に就職活動を行うことを希望する場合における取組について説明します。

大学等卒業者については卒業前から就職活動を引き続き行っていること、専修学校修了者については履修した科目が「技術・人文知識・国際業務」等の就労資格に係る活動と関連が認められた場合において、いずれも直前まで在籍していた教育機関から就職活動に関する推薦状を受けていることを要件として、最長で1年間の滞在を認めています。

また、最近の就職活動中の方に係る取組としては、地方公共団体が実施する就職支援事業に参加し、インターンシップを含む就職活動を行う場合に、最長2年間の滞在を認めることとしています。

この他にも継続就職活動中に就職が内定した者の採用までの間の滞在について認めており、これらは全て「特定活動」という在留資格で許可しており、資格外活動についても留学生と同様に包括的に許可しています。

なお、大学卒業後も継続して起業活動を行う場合の取扱いについては、卒業後から6月以内に、会社法人を設立し企業して在留資格「経営・管理」に在留資格変更許可申請を行うことが見込まれる優秀な企業・経営能力を有する留学生の場合、卒業した大学等による推薦を受け、企業に必要な事業所が確保され、具体的な事業計画書が提出されている等により、確実に起業することが認められるときは、「特定活動」の在留を許可し、最長で卒業後6月の滞在が認められます。

7 外国人留学生の国内での就職促進のための取組

平成30年6月15日に閣議決定された「経済財政運営と改革の基本方針（骨太の方針）」、「未来投資戦略」及び「規制改革実施計画」において、外国人材の受入れを拡大するため新たな在留資格を創設すること、外国人留学生の国内での就職を更に円滑化すること及び在留資格変更申請時の提出書類を簡素化すること等が盛り込まれました。

これら施策の実行に向けた留学生の国内での就職促進のための取組として、①我が国大学を卒業した留学生が働ける業種の幅を更に広げるための在留資格の見直し、②クールジャパン分野に関連する業務に更に広く従事可能となるための在留資格の見直し、③「留学生の在留資格『技術・人文知識・国際業務』への変更許可のガイドラインの改定、④留学生の国内での就職支援に係る個別の事前相談に応じる相談窓口の開設、⑤一定の基準を満たす企業に就職予定の留学生について在留資格変更許可申請時の提出資料の簡素化といった取組を検討しているところであり、③については、許可事例や不許可事例を多く掲載することにより、申請時における予見可能性を高めることを目的として、平成30年12月にガイドラインを改定し、既に公表しているところです。

また、①については、独立行政法人学生支援機構による調査結果によると、平成28年度卒業の

外国人留学生の日本国内における就職率が約36%であったことのほか、「日本再興戦略2016」において、これを5割へ向上させることが目標とされていたことを踏まえて検討を行い、国内の大学・大学院を卒業・修了し、日本語による高いコミュニケーション能力（N1レベル等）を持つ者が、在学中に習得した知識や日本語を活用した円滑な意思疎通を要する業務に従事する場合に、日本人と同等報酬を受けるとの一定の要件を満たす場合は、「特定活動」への在留資格変更を許可することとし、現在、パブリックコメントにより意見を求めているところです。

なお、これまで就労を目的とする在留資格への変更許可申請を行い、在留が認められた留学生のうち、約9割が許可されている在留資格「技術・人文知識・国際業務」ではいわゆる総合職としてのオフィスワークが対象とされていたところですが、今後は、このように大学等卒業者に対する就職の幅を広げることにより、主体的かつ臨機応変に日本語を活用する業務が含まれている場合であれば、これまでの総合職としてのオフィスワークに限らず、契約機関における業務全般を行うことが可能となりますので、例えば、ホテルやレストランにおける接客や小売店での対面販売のほか、工場のラインで従業員の指揮・指導をする傍ら、自らもライン内で作業を行うことが認められることとなります。

8 日本語教育機関の適正化に向けた取組

平成30年12月25日にとりまとめられた「外国人材の受入れ・共生のための総合的対応策」における126の施策の中には、留学生に関する資格外活動に係る問題等を踏まえた日本語教育機関の質の向上や適切な管理のための施策も盛り込まれています。

具体的には、生徒の出席率や不法残留者等の割合等の基準の厳格化、留学生の日本語能力に係る試験の合格率等による厳格な数値基準の導入による留学告示からの抹消基準を厳格化するほか、告示基準適合性に係る定期的な点検及び地方出入国在留管理局に対する報告の義務付け等について速やかに告示基準を見直すとともに、日本語教育機関の適正性判断に係る選定基準についても見直すことにより適正化を図るといった内容となっています。

法務省においては、これら施策への対応に向けて関係省庁と連携しつつ、告示基準の改正案について検討しており、パブリックコメントの開始に向けて作業を進めているところです。

9 おわり

今後、留学生に対する就職支援により業種の幅が拡大し、日本での就職のチャンスが拡大する一方で、日本への出稼ぎを目的とした留学生や日本への留学の入口とも言える日本語教育機関の適正化を図っていくことが喫緊の課題となっていることを踏まえると、政府機関と教育機関とが更なる連携を図ることにより適正な留学制度に向けて取組が不可欠であると考えます。

【日本留学レポート】

新たなる一歩へ

-日本の修士課程で学んだ経験をもとに-

To The New Step:

Based on my Experiences from Attending a Master's Degree in Japan

千葉大学大学院教育学研究科修士 シスワン マユリ

SRISUWAN Mayuree

(Faculty of Education, Chiba University)

キーワード：修士論文、教育、日本留学、大学院留学

はじめに

2019年3月、私は千葉大学大学院を卒業した。先に言っておくと、私は沖縄生まれのタイ人である。もともとタイ人の両親が仕事の都合で沖縄に一時期滞在していたことがあり、私はその滞在中に生まれ、小学5年生まで日本の学校教育を受けた。その後、タイに帰国し、タイの大学を卒業するまでタイに滞在していた。そのため、留学生とは言っても初めて日本に来る留学生とはまた違う立場であり、少し異なった視点から日本での生活を味わえたと感じている。

本レポートでは、主に日本における修士課程の2年間の生活を通して感じたこと、よい経験になったこと、気付かされたこと等を書きたい。そして、本レポートが今後、日本への留学に興味がある人やこれから日本へ留学する人たちにとって、少しでも役に立てるような情報になれば嬉しく思う。

留学の決意から大学院生になるまで

なぜ私が日本に留学したいと思ったのか、なぜ日本を好きになったのかと疑問に思う人はいるであろう。「はじめに」で記したように、私は日本（沖縄県）とタイ（バンコク）の両国で暮らしたことがある。そのため、日本を好きになったきっかけは生まれ育った日本が故郷のように感じたからだと言っても過言ではない。それは、日本だけではなく、タイも同様であり、両親がタイ人であることからタイを自分の故郷のように感じていたということも事実である。両国を自分の故郷のように感じていた私は、タイの大学でも日本語を専攻して日本語を学び続け、大学を卒業した。その後、もし奨学金

を受けられる機会があれば、日本の大学院に進学したいと願っていた。そして、その機会が大学を卒業した2-3ヶ月後に訪れ、私はなんとか奨学金を受けることができた。正直に言うと留学を決意した時は、ただ日本に行きたい、故郷にもう一度戻りたいという想いだけがあって、大学院の厳しさや難しさは全く予想してもいなかった。大学院では、ご存じの通り、自ら課題を見つけ、それをテーマに研究に取り組み、論文にして書き上げていくことが最も重要である。そのため、奨学金を受けるには、自分が何の研究をしたいかを明らかにし、研究計画書を書くことが必要である。

まず、私は自分が研究したい研究テーマを探した。私はタイと日本の教育を受けてきたが、その中でも最も印象に残っている学校行事があった。それは運動会（体育祭）である。私はタイと日本の運動会を実際に経験したことがあり、同じ運動会という行事であっても教員の児童・生徒に対する働きかけや行事の実施方法に違いがあることに気づき、そこから両国の間でなぜそのような違いが見られるのか、また、両国の異なる教育から児童・生徒はどのような学びが得られるのか等を明らかにしたいと思い、自身の実際の経験に基づいてタイと日本の比較研究のテーマとして研究計画を作成した。

次に、自分の希望する大学院と連絡を取る段階に入った。私が千葉大学の大学院を希望したきっかけは、タイの大学で日本語を学んでいた際に、短期留学生として1年間千葉大学に留学することができるとの機会が与えられたからだった。それをきっかけに、私は大学院も是非千葉大学に進学したいと考え、短期留学生だった際にお世話になった先生方と連絡を取ることにした。その後、メールでのやり取りを通して、先生に研究計画書を検討していただき、自分の研究を指導していただける先生を紹介していただいた。紹介していただいた先生とメールでやり取りをすることも多かった。そこで私は初めて日本語でメールを書く難しさを実感した。一度も顔を合わせたことがない先生とメールのやり取りを通してその研究室の専攻生（又は研究生）として受け入れてくれるように検討していただくのは留学生にとってとても勇気がいるし、とても緊張する。先生にメールを返信するために、文章を書いた後は消し、また書いては消しの繰り返しで、日本語の文法に間違いがないように、そして失礼のないように書かなければならないと思った。それが大学院に入る前の最初のミッションだったように感じる。幸い、その研究室の先生は、よく留学生を研究室に受け入れているため、私も歓迎して下さった。専攻生になった私は、入学試験に向けて、過去問を解いたり、教育学の専門用語を覚えたり、指導教員が担当している授業に参加したりして、試験に向けての準備を進めた。

入学試験が近くなると、さらに不安とプレッシャーが高まった。なぜなら、合格できる人数は数少なく限られており、私のような留学生は普通の日本人と同じ試験を受けなければならないからである。不安とプレッシャーのあまりに日本人に助けを求める勇気もない私に、研究室のある中国人留学生がごはんに誘ってくれた。彼女は、大学院の入学試験の経験があり、試験に落ちたこともあった。それでも諦めずに次の年にまた試験を受けてやっと合格したと話した。彼女は、自分の経験をもとに様々なアドバイスと応援の言葉をくれた。彼女は自分と同じ留学生である私が、試験前にどれほどの不安

とプレッシャーを抱えているかを誰よりも理解していた。だからこそ私の力になりたいと彼女は言った。

その結果、私は指導教員の指導や中国人留学生のアドバイスや応援の言葉のおかげで入学試験に無事合格することができた。緊張と不安から解放され、私は試験の結果が貼られている掲示板の前で喜んでいた。しかし、これは大学院のはじめの一步に過ぎず、本番はこれからだった。

修士論文が完成するまで

先ほども触れたように、大学院では、主に自分の研究を書き上げていくために、実践を重ね、実践の結果や考察、内容の構成や妥当性等を様々な人の視点や角度から検討してもらう。また、多くの意見や指摘を受け、そこからもう一度自分の研究内容を見直し、内容を修正して完成させていく。このような作業の繰り返しは、約2年間続くのである。とても厳しい道のりであり、メンタル的にも強くなくてはならない。

修士1年目の際は、まだ研究者になる覚悟が十分になかったため、先生や他の院生に研究の内容を批判されることを恐れて避けていた。毎週のゼミで私はなるべく、他人から突っ込まれないような内容ばかりを検討してもらっていた。相手から批判されることは自分にとって恥ずかしいことで、留学生である自分の日本語能力が乏しいことを指摘されることだと思い込んでいた。しかしそれは大間違いだった。

修士2年目に入ると、そろそろ論文も完成させなければならない時期が迫ってきて気持ちが焦る一方であった。何としてでも論文を完成させなければと思い、私は2年目に入ってやっと勇気を振り絞ってコンフォートゾーンから抜け出し、批判される覚悟をした上で研究の内容全てをゼミや中間発表会で発表した。時には心が折れそうになるくらい厳しい指摘をもらうこともあり、絶望的な意見ももらう時もある。さらには、発表後に誰からの質問や意見もなく長く沈黙が続く状態になる時もあった。そこで私は1つ学んだことがあった。それは、コンフォートゾーンにいることや沈黙状態にいることよりも厳しい指摘をもらった方が研究の方針ははっきり見えてくるということである。すなわち、失敗や批判を恐れてはいけないということである。

他にも、私は修士論文を書く上で苦戦したことがある。それは日本語で論文を書くことである。もしあなたも同じ留学生であれば、論文を書くときまでいなくても日本語で作文を書くことがどれほど難しいか理解できるであろう。日本語は母語でもないし、漢字等を覚えたり、上級レベルの文章の文脈を理解して文法や表現を使い分けたりすることができるまでに相当時間がかかる。日本語を学んでいる人なら誰もこのような壁に一度は突き当たったことはあるだろう。しかし、論文の執筆は私がこれまで学んできた日本語よりもさらにレベルが高く、文章を書く上で考えなければならないことは多くあった。基本的な文法や表現の正しい書き方はもちろん、研究の内容の正確さ、論文で使うよう

な硬い表現や専門用語、内容の構成等、同時に考えながら書き進めなければならない。これは留学生にとって非常に大変なことである。私は自分の頭の中にいるタイ語を日本語の文章に書き換えて日本人にうまく伝えられなかったことが何度もあり、指導教員や他の学生にも誤解を招いたことが度々あった。このような苦労がある中で、私は日本人のチューターがいて良かったと思っている。私の知る限りでは日本のほとんどの大学では、留学生の大学生活や日常生活のサポートをするために日本人をチューターとしてつけてくれるシステムがある。私もはじめの1年は日本人のチューターがついていた。チューターは授業の履修登録の仕方や論文の書き方等、様々な面でサポートしてくれた。そのおかげで私は何度も助かった。

研究室にもよるかもしれないが、私の研究室では、修士課程や博士課程の先輩や後輩が、修士2年生たちの論文の査読に協力し、論文の提出締め切りまで査読と修正の繰り返しをするハードな時期がある。それを私の研究室では「鬼コース」と呼んでいる。確かに地獄を想像させるような辛い時期だったと今も思い出されるくらい「鬼」だった。

振り返ってみると、日本人と同様に日本語で修士論文を150ページ近く書ききった自分は本当に信じられないくらい頑張ったと感じている。しかし、私が日本の大学院を無事卒業できたのは、周りに私を支えてくれた人たちがいたからだと思う。私一人の努力だけでは、ここまでの論文は書けなかつただろうし、メンタル的にもここまで持たなかつただろう。もし可能であれば、学位記にこれまで私を支えてくれた人たちの名前を全て載せて欲しいくらい心の底から感謝の気持ちでいっぱいである。

「学ぶ・教える」の経験

論文を書く上で私が指導教員から学んだことは山ほどあるが、その中でも印象に残っていることがいくつかある。例えば、足し算よりも引き算が上手にならないといけないことである。論文を書くために、我々はその材料となる資料を集めたり実践をしたりする。そして気づくと手元にある資料が徐々に多くなっていくことはよくあることである。必要だと思う資料を見つけたらそれをどんどん集めていく作業を足し算に例えるとしよう。そうすると、重要なのは引き算を上手くできるかどうかである。要するに引き算は、大量に集めた資料からどれが研究に必要で、どれが研究に関係ないものかを判断する作業のことである。確かに足し算よりも引き算をすることの方が難しいと私自身も実感した。他にも、論文を書く上で重要なことは、自分の論文を読みながら自分で漫才をすることであると先生は教えてくださった。すなわち、自分の書いた論文のボケ（穴）を見つけ、自分でツッコミ（指摘）を入れることである。

さて、ここまでは論文執筆の経験を色々語ってきたが、大学院では研究が全てではないことを忘れてはいけない。私は、教育学研究科に所属していたため、大学院の授業では学ぶ立場だけでなく、場合には教える立場に立つ時もあった。そして改めて「教える」ということに色々気づかされる経験を

得た。私はある授業で他の日本人学生とチームを組んで家庭科のゲームアプリを開発し、それを実際に小学校で iPad を利用して授業を実践したことがあった。教える我々は家庭科の大切な内容を児童に理解してもらいたいという目的があった。しかし、いざ家庭科の教えたい内容をゲームの世界に取り入れるとなった時に、ゲームの楽しさや（複雑すぎない）遊びやすさ等といった点に配慮することを忘れてしまうことが多かった。それは教える側、つまり教員の立場に 100%立っているからである。そのため、我々のチームは、児童にもっとゲームに興味を持ってもらえるようにアプリを何度も改善した。例えば、ゲームのキャラクターは性別を問わず、誰もが遊びたいと思うような親しみやすいキャラクターを描いてみたり、ゲームの展開やミッション、ラッキーアイテム等、学ぶ側を引きつけるような工夫をしたりした。

我々は、ゲームアプリを完成させるまでに約 3 ヶ月もの時間をかけた。そして完成したゲームアプリを実際に児童に遊ばせながら授業を進めた。その横で様々な教科の教員や学生が授業を観察し、評価をした。実践は無事に終えることができたが、フィードバックはイマイチだった。評価には児童を引きつけるような工夫が所々にあったのは良かったが、児童がそこから何を学んだのかがはっきり見られなかったとあった。確かに、我々は後半、ゲームの楽しさを意識しながらアプリを改善したため、児童に何を学んでももらいたいかという部分が薄れてしまったと反省した。

この授業開発は、「教える」ということは非常に奥深く難しいものだということを感じさせてくれた。学ぶことは自分自身の学力向上に必要であるため、自分を中心に物事を考える。一方、教えることは相手に物事を理解させることが必要であるため、自分を中心に物事を考えては相手に伝えたいメッセージがうまく伝わらない場合がある。児童が、授業をつまらないと感じたり、先生の進めるテンポが速すぎて追いつけないと感じたり、先生の教えていることが難しすぎて理解できないと感じたりするのも、教える側が学ぶ側の立場に立てていないからかもしれない。まずは、児童と同じ目線で見、自身の教え方を見直すことも重要であると気づかされた。他方で、学ぶ側につられて楽しく授業をしないと学ぶ側が振り向いてくれないと意識し過ぎてしまうと、我々のチームが経験したように、学ばせたい肝心なところを失ってしまう可能性がある。児童に難しいことを楽しく学んでもらうことは教員にとって理想かもしれないが、実際は、難しいことと楽しいことの釣り合いをとることがこんなにも難しいと私はこの経験を通して実感した。

修士課程の2年間で、私は本レポートには書ききれないほど多くの貴重な経験を得ることができた。これも日本の大学院に進学することができたからだと思う。



家庭科のゲームアプリを一緒に開発したチーム



開発した小学生向け家庭科の学習ゲーム

最後に

私は修士課程で論文を書いて行き詰まるたびに、日本への留学を決意したことが本当に正解だったのか自分に問うことがあった。研究で躓いて涙を流したり、投げ出したいくらいストレスが溜まったり、なかなか上手くいかないことだらけだった。母国に頻繁に帰ることもできないし、孤独を感じることもよくあった。しかし、振り返ってみると人生の中で一番自分を強く成長させたのは、今回の留学だったと今は胸を張って言える。日本に来る前は、日本語能力が向上すれば、それだけで留学したことに意味があると考えていた。しかし、実際に日本の大学院に進むと、日本語能力はもちろん、メンタル的にも倍ぐらい強くなったと感じる。私は、この修士課程2年間を通して、大学院生として、そして留学生として、数え切れないほどの困難の壁に立ち向かってきた。そして「困難にぶつかったり、心が折れたりすることは当たり前。大切なのはそこからいかに素早く立ち上がれるかどうかだ！」ということを学んだ。

生まれ育った母国を離れて他国へ留学することは勇気が必要だと思う。留学したいと思っただけでもその人を素晴らしいと私は思う。もしあなたが今、留学を考えているのであれば、留学は大変なことや辛いこともあるけれど、同時に新しい世界が見られるチャンスでもあると捉えてみてはどうだろうか。また、一人ひとりが留学で得られた経験は異なるのだから、当然留学した経験を心の中でどのように受け止めるかはその人次第である。私は本レポートに書いたことを、読み手に100%共感してもらいたいと思ってはいない。なぜなら、これはあくまでも私個人の立場と視点から得られた経験と学びに過ぎないからである。しかし、本レポートが誰かの留学決意のきっかけとなり、日本に留学して、自ら日本での生活を体感そして実感し、自分なりの歩み方で多くの学びと経験を積んでほしいと願っている。

私は日本に留学して、辛かった時や楽しかった時も色々あったが、それらを思い出として心に収めておくよりも、自分が留学で得られた学びや経験の全てを生かして他の人にも役に立てるように社会

に貢献したいと思っている。

帰国後、私はタイ人に日本語を教える教師になるが、そこで日本語を教えながら、留学で学んだことも伝えつつ、これから日本に留学するタイ人や日本に留学したいタイ人の手助けができたと思う。また、タイに留学にきた日本人やタイに留学したいと考えている日本人の力にもなれると嬉しく思う。それが、奨学金を与えてくださった日本の文部科学省と、私が大学院を卒業するまでにずっと支え続けて来てくださった多くの日本人やタイ人に感謝の気持ちを伝える方法、そして恩返しができる方法ではないかと思う。

【海外留学レポート】

韓国で過ごした 345 日

-外国人として生きるということ-

My 345 Days in Korea: Living as a Foreigner

近畿大学国際学部国際学科東アジア専攻韓国語コース 小林 可奈子

KOBAYASHI Kanako

(Faculty of International Studies, Kindai University)

キーワード：韓国留学、異文化理解

はじめに

2016年9月、私は学部のプログラムとして約一年間韓国・ソウルに留学をした。団体での留学だったとはいえ、大学に入学してわずか半年も経たずに海外に放り出されたのだ。大学入学当時、私は好きだったK-POPへの情熱と漠然とした海外留学への期待感だけを胸に大学生活をスタートさせ、留学までの半年間「詰め込み教育」とも言えるような韓国語の授業を毎日受け続けた。こういった書き方をするとこのプログラムを否定的に捉えているようだが、結論から言うと私は留学を終えて1年ほど経った今、この早期留学プログラムは私にとって成功であったと捉えている。私が大学1年生～2年生にかけて韓国で感じた様々な感情、そして出会った人々との出会いが今の私に大きな影響を与えていることが確かだからだ。

留学を始めて

私はソウルにある慶熙大学にて留学生生活を過ごした。寮も学内に位置する学生寮に滞在した。入寮の手続きや、口座開設の準備、外国人登録証申請の手続きなど、慶熙大学にいる今回のプログラムの担当教員の方が通訳もしながらスムーズに行ってくれた。そういった小難しい作業において学部プログラムの恩恵をかなり受けていたように思える。

慶熙大学はソウル屈指の名門大学であるがゆえに、大学周辺には学生街がしっかりと存在していて、必要なものはほとんど手に入るほどであった。しかしながら、その他の有名大学ほどに人が集まるよ

うな学生街でもないため、留学生を送るにはとてもちょうどいい環境であったと思う。キャンパスはソウル市にあるソウルキャンパスと、ソウルから南に行った水原市付近にある国際キャンパス、ソウル近郊で平和福祉大学院のある光陵キャンパスの三つがある。私は語学堂（外国人が韓国語を学ぶための学校）に通っていたためソウルキャンパスで過ごした。また慶熙大学は韓国国内でも特に外国人に対する韓国語教育に力を入れている学校である。したがって、大学内にある語学堂（国際教育院）には世界中から韓国語を学ぶためにやってきた学生が集まっている。のちに言及するが、韓国留学は韓国語を学び韓国人と出会うためだけの留学ではないということを、この語学堂に通いながら痛感することになる。

留学を始めて最初の約1週間は同じ学科の日本人の友達と一緒に観光気分で過ごしていた。ソウル市内の観光地である明洞や、服が安く手に入る人気スポットの高速ターミナルなどに足を運んだ。それに寮は二人一室で、ルームメイトも気の知れた同級生。慣れない外国での暮らしを始めたばかりで不安も多かったが、いつも日本語の通じる友達が一緒にいてくれた。留学をスタートさせて間もなく、ホームシックになる人が多いと聞いていたこの時期に、私が寂しさや不安よりもこれからの生活に対する希望や期待感を感じられたのは、この学科の友達の存在が大きかったのだろう。



図1 留学生活初日

挑戦と自信

私が今回韓国に留学した理由は、韓国語の向上はもちろん、外国人との交流を経て幅広い視野を身につけることであった。そして同時に私が韓国留学するにあたって一番不安要素としていたことは自分の韓国語の実力だ。高校時代に韓国語の授業を受けていたわけでもなく、独学で韓国語検定や TOPIK をすでに修得していたわけでもなかったからだ。そういった経験を経ている同級生を見ると勝手に劣等感にかられていた。そんな自分に不甲斐なさも感じた。しかし、韓国に来てから韓国語が主要言語となり、使用頻度が増えたため少しずつではあるが、わかることも増えてきたのだった。

そして留学開始から約1ヶ月経ったある日、先生がクラスで韓中日キャンパスハーモニーという大会について紹介してくれた。その大会は中級1（語学堂では初級1～高級2にクラス分けされている）から参加資格があり、日本人・中国人・韓国人がグループとなって参加する UCC (User Created Contents)

映像プレゼンテーション大会であった。テーマは「日中韓の文化交流」と決められており、そのテーマに沿って予選までに動画を製作し、本選では動画の放映とそのテーマについてのプレゼンテーションを行うという流れであった。私は当時中級1で参加資格を満たしていたため先生は「賞金ももらえるし、いい機会だから出てみなよ」とおっしゃった。その時、私は自分のレベルでは到底無理だと思っていたため、全く参加する意思はなかった。今思うと当時の私は自分の実力に見切りをつけて、挑戦することや行動することに臆病になっていたのだと思う。しかし、同じクラスの中国人のお姉さんが「一緒に出たい。あなたと一緒にならきつとうまくできると思う」と言ってくれたため、出場を決めた。その一言は今でも明確に覚えている。

そして先生の紹介で韓国人の男の人と三人一組のチームを組むことになった。しかし、大会の準備をするうちに自分の語学力不足と積極性の足りなさを感じるようになった。3人で会議をしているのに主に話をしているのは私を除いた二人になっていたり、私の意見を求められてもうまく伝えられなかったり。今考えるとやはり私は、その大会に参加できる本当に最低限のレベルでしかなく、チームのメンバーに頼らざるを得ない、ただそこにいるだけの日本人メンバーだったのだろう。私の自尊心はとっくに砕けていた。

そういった私の感情とは裏腹にチームが作成したUCC動画は予選を突破し、本選へと駒を進め、あっという間に本選当日を迎えた。本選では直前、緊張でものすごく手が震えて、汗が止まらなかった。そこにあった問題は韓国語の実力に関するものなどではなく、人前で舞台に立つという挑戦に対する恐怖心だった。私たちの出番を迎える直前にメンバーの二人が自信を持って舞台に上がろうと私に声をかけてくれた。私は言葉の通り自信を持つためにこれまで行って来た準備過程を思い出しながら舞台上上がった。

結果として私は思うようにプレゼンをすることはできなかった。声は震え、必死に覚えた文は自然と発することはできなかった。思うようにはできなかったけれど、私なりに努力した結果ではあった。いつも誰かが前に入るのを見送っていた私が、初めて自ら一歩前に踏み出せたと感じた瞬間だったのだ。結果、私たちのチームは見事準優勝し、賞金に300万ウォンと航空券を獲得した。その勝因は私のミスをもカバーできるほどに見事な二人のプレゼンと、毎日編集を重ねたUCCにあったと思う。

大会の結果をすぐに日本にいる両親に伝えた。両親は電話越しに歓喜の声を伝えてきた。私が異国で頑張っているという姿を何らかの形で両親に示すことができたのが賞金よりも何よりも嬉しかった。挑戦することの意味、挑戦することによって得られる自信、そして挑戦を後押ししてくれる周りの人々の存在を再認識することとなったこの大会は、私にとってかけがえのない思い出となった。



図2 韓中日キャンパスハーモニー当日



図3 表彰状

인연 (因縁)

韓国語に인연(因縁)という言葉がある。日本語の「因縁」という否定的なイメージよりは「縁」という肯定的イメージを表す単語だ。私の留学生活はまさに인연(因縁)の連続であった。今も留学生活を振り返った時に思い出される瞬間は、一人で過ごした瞬間ではなく、誰かと一緒にいたもう二度と同じ時のない瞬間たちだ。特に韓国で出会った外国人留学生との出会いは、私の価値観、そして今後の将来を大きく左右することとなった。ここからは、私が留学中に彼らと出会ったことで見つけた目標、そして帰国後の彼らとの交流について述べていきたい。

私が入寮した慶熙大学の世和園という寮には、一階に共有スペースのようなものがあり、そこにはテレビやパソコン数台、電子レンジ等が用意されていた。寮生は自由に共有スペースを活用でき、夜になると約束したわけでもないのに自然と人が集まって、気ままにそこにいる人と話すという雰囲気であった。最初は何も知らなかったため、学科の友達とただ集まって話していたのだが、いつの間にか学科の友達以外の外国人留学生や韓国人学生とも友達になって、いつの間にか私たちは「世和ファミリー」と言うようになっていた。日本では出会ったことのない国からやって来た留学生たちと、不完全なたどたどしい韓国語で会話をしていた。もはやどんな話をしていたのかも、どんなことが契機で仲良くなったのかも覚えていないけれど、この寮で私は国籍も性別も関係なく人と人として出会い、仲良くなっていった。



図4 世和ファミリーと一緒に

特に私が仲良くなった友達は中国人の友達であった。当時、韓国には韓国語を学ぶ外国人留学生の中で中国人が圧倒的多数を占めていて、特に語学堂のクラスのレベルが上がれば上がるほど、多国籍だったクラスが一変し、アジア（中国語圏）の学生が増えていった。そのような中、二学期連続で彼女と同じクラスになり、私たちは授業後や休日に一緒に遊びに行くようになった。彼女は中国にある芸能系大学に在学し、韓国で語学留学をしていた。私と彼女は美術館や芸術系の展示場に行くことが好きだったため、共にいろいろなところに鑑賞しに行った。彼女の韓国語はお世辞にも上手とは言えないレベルではあったが、私たちは分からないなりにお互いに話し方を工夫していたのだと思う。

次第にそんな彼女の育って来た環境である中国、そして中国語について興味を持つようになった。私はそれまで中国に対してあまり良いイメージを持っていなかった。しかし、彼女と仲良くなって、国籍も母語も違うけれど、そういった違いを超えた付き合いを通して、私の中での中国に対するステレオタイプが変わっていくのを感じた。留学を始めた当初、私の目標は韓国語を学ぶこと、そして異文化に対する理解を深めることであった。この漠然とした目標の中に出会った人々が今まで過ごして来た国に、私が直接足を運んで直接見て、感じてみたいという具体的な目標ができた。そして、帰国して2ヶ月ほど経った頃に彼女のいる中国・北京に一人で旅行することにした。

初めての中国旅行はとても新鮮で、新しい世界との出会いを感じた3日間だった。私が彼女と出会わなければ見ることのできなかつた景色だっただろう。私にとって中国を知る機会が彼女であったように、私が誰かにとって日本を知るきっかけになったりする。フィールドが韓国であれば韓国のことだけを知ることができるというのは、大間違いだ。そこで出会った人々との縁が新しい分野への関心を結んでくれることもある。そういう可能性を秘めているのも留学なのである。世界中に散らばった今も、変わらず連絡を取り続けている。留学中に出会った友人たちは私にとって大事な一生の友達になった。

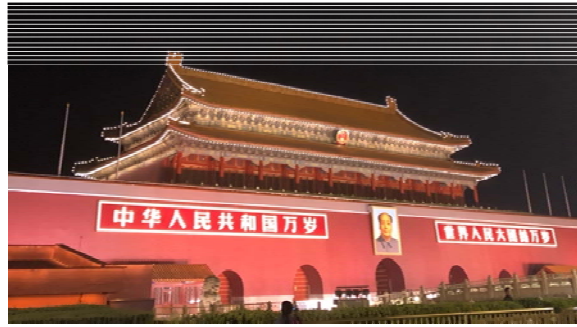


図5 中国・天安門

外国人として生きること

私が日本を出て、初めて外国である韓国で外国人として生きたこの345日の留学生活は、日本では体験したことのない様々な自分の姿や感情に接した日々であった。言葉も不自由で、家族もいない不慣れた環境で生き抜く中で、何気ない日常を省みることができた。特に今まで育てて来てくれた両親に対する感謝の気持ちを強く感じた。大学生になって、なんとなく自立したような気になっていた私が本当は一人では何もできないという無力さを知った。そして外国人として生きていく中で感じる空虚さ。韓国にいたから尚更感じていた部分もあったかもしれない。しかし、その外国人であることを武器にして様々なことに挑み続けられた面もある。大会に参加できたことも、留学生同士の絆が深まったこともそういった影響があったのではないかと思う。外国人として生きるということは留学生活における醍醐味である。これからの留学を検討している方々、そして留学生活を送ることになる方々に私が強く伝えたいことは、あなた自身が直接感じた感情を大事にしてほしいということと、初心を忘れないということだ。そして常に新しいものと積極的に出会えるように自主的にアクションを起こしていくことが、留学生活を終えた後にも残る何かを見つけることができる機会になるのではないかと思う。私にとって韓国留学は私らしさを見つける経験になった。あの頃の生活は今の私を動かす原動力であり、大切な思い出だ。



図6 語学堂卒業式

次号予告

特集「海外留学することの意義」

海外留学の魅力とそれがもたらす効果、留学コンセプト の変化と役割(予定)

編集 後記

満開の桜と共に新年度がはじまりました。美しい桜にはとても癒され、励まされます。さて、今月は「グローバル化する高等教育」と題し、事例紹介では、「ASEANからの留学生を継続的に受け入れ、交流事業を実施」、「可能性のある国、コロナビ
アへの留学」、「外国人留学生の現状と就職促進に向けた取組について」というタイトルでご寄稿いただきました。また、日本留学レポートでは「新たな一歩へ」、海外留学レポートでは「韓国で過ごした345日」をお伝えしております。

留学生支援に携わる皆様にと参考としていただけるような内容を目指してまいりますので、引き続きよろしくお願いたします。

(編集部・T)

Web Magazine “Ryugakukoryu” (Student Exchanges)

“Ryugakukoryu” delivers a variety of necessary information and materials to faculty and staff engaged in acceptance and dispatch of international students, and educational guidance.

The magazine has been made public online without charge since April 2011.
(Issue date: 10th of each month)

ウェブマガジン『留学交流』2019年4月号

Vol.97

平成31年4月10日発行

編集 独立行政法人日本学生支援機構

(編集部)留学情報課

東京都江東区青海2-2-1(〒135-8630)

電話 (03)5520-6111

FAX (03)5520-6121

Eメールアドレス ij@jasso.go.jp

本誌へのご意見、ご感想は、こちらのメールアドレスまでお願いいたします。